

第一〇三回 日本医史学会・第三〇回 日本歯科医史学会 合同総会 演題 目次

特別講演(1)

新潟県における医学教育前史……………

蒲原 宏……………三三

特別講演(2)

日本医史学会と日本歯科医史学会……………

谷津 三雄……………三六

一般口演

1 飛鳥京庭園跡出土木簡「西州統命湯」の出典について……………

小曾戸 洋・真柳 誠……………三八

2 『玉葉』における九条兼美の湯治……………

寺川 華奈……………三〇

3 三位法眼と半井明重……………

石原 力……………三三

4 『雲庵抄』について……………

宮川 浩也……………三四

5 『維摩経』にみる医の心……………

杉田 暉道……………三六

6 明治期発行の医籍録に掲載された新潟県内の医師・歯科医師人名……………

樋口 輝雄……………三八

7 近藤家文書について——大森寿庵と越後の眼科医近藤文泰……………

広瀬 秀……………三九

8 長岡市出身の医学者・榑野直の筆記ノートについて……………

唐沢 信安……………四〇

9 陸軍航空医学……………

黒澤 嘉幸……………四二

10 十五年戦争と日本民族衛生学会(協会)……………

助 昭三……………四四

11 藤浪鑑教授とがんの疫学調査(二) 林直助教授の協力と戦後の研究への寄与……………

青木 國雄……………四六

12 福岡医科大学創設者・大森治豊……………

佐藤 裕……………四五

13 横浜三島堂病院略史……………

中西 淳朗……………三五

14 植民地時代朝鮮のハンセン病医療に従事した医師周防正季……………

魯 紅梅……………三五

15 血圧測定の創始者ステファン・ヘイルズ……………

藤倉 一郎……………三五

16 一〇一年前のドイツ留学生の絵葉書——プレスラウの今昔比較……………

石田 純郎・小田 皓二……………三六

17 未発表文献(Minachon文書)によるパリ一般病院の誕生……………

清水 陽人……………三六

18 ナチスの「安楽死」作戦とミュンスタール司教フォン・ガールレン……………

泉 彪之助……………三六

19	グレート・オーモンド・ストリート小児病院の設立について	柳澤波香	三六四
20	画家トゥールーズ・ロートレック (1864-1901) の疾患について	小林晶	三六六
21	大正四年看護婦規則制定以前に使用されていた看護婦の名称について	平尾真智子	三六八
22	GHQによる戦後の看護教育カリキュラムの成立と経緯	佐藤公美子・坪井良子	三七〇
23	"American Journal of Nursing" の記事に見る二〇世紀の日本の看護	大石杉乃	三七三
24	二十世紀前半における京都・岩倉の「国際化」について (その二)	橋本明	三七四
25	昭和戦前期の精神医療におけるジェンダーバイアス	鈴木晃仁	三七六
26	製本おそるべし——『神経学雑誌』のばあい	岡田靖雄・小峯和茂	三七八
27	日本の敗戦直前後の医事雑誌と発刊事情	寺畑喜朔	三八〇
28	ハノイ現存古医籍の特徴	真柳誠	三八二
29	『口歯類要』における歯痛に関する考察	西巻明彦・寺師睦宗	三八四
30	古典医書における字から詞へ変化例	郭秀梅・加藤久幸	三八六
31	疾病史に見る時代区分について	小曾戸明子	三八八
32	「脈経」二十四脈状解析——「脈経」中における浮脈と他脈状の関係	中川俊之	三九〇
33	『甲乙経』における刺入深度・呼数の一考察	吉岡広記	三九二
34	鍼灸書における婦人病証——漢代から唐代まで	木場由衣登	三九四
35	鬼眼穴の考察	上田善信	三九六
36	『延寿院切紙』における導道・三喜像	遠藤次郎・中村輝子	三九八
37	曲直瀬道三と佐野——「足利の三婦」の検討	中村輝子・遠藤次郎	四〇〇
38	吉益東洞『医方古言』攷	館野正美	四〇二
39	松平忠信の古方派批判	町泉寿郎・花輪壽彦・寺澤捷年	四〇四
40	モグサの産地としての伊吹山の歴史	鶴田泰平	四〇六
41	旧約聖書和訳過程における鳥類名称の取扱いについて	水谷惟紗久	四〇八
42	『重訂解体新書』所引の中国書籍の研究 (医書について)	陶恵寧	四一〇
43	三輪愿『薬真途異語』と三輪試『大和医語』	友部和弘・小曾戸洋	四一二

44	中国伝統医学と道教(第二十三回)「神仙」	吉元昭治	四四
45	『古事記』の中の身体に関わる表現	計良吉則	四六
46	江戸時代の化粧と医療——『容顏美艶考』と『都風俗化粧伝』の分析を中心に	鈴木則子	四八
47	王朝文学時代の歯科医療	東智	四〇
48	『病草子』にあらわれた歯科疾患風俗に関する一考察」第三報	湯浅高行・藤野坦男・屋代正幸	四三
49	Jack Dreschの補綴学への貢献について	平田幹男	四四
50	一九世紀中期の日本と西欧の義歯の比較	新藤恵久	四六
51	ガレンスとヴェサリウスの解剖学の比較研究——筋系を例にとつて	坂井建雄	四六
52	ガスパール・ポアアン「Theatrum Anatomicum」について(三)——De Corporis Humani Fabrica Libri III (1590)の分析	月澤美代子	四〇
53	フォルヘー・コイターの解剖学——研究対象の指定をめぐつて	澤井直	四三
54	スネイプ『馬体解剖学』(英文)一八六三年について	松尾信一	四四
55	レオナルド解剖手稿の心臓記述に関する年代的考察(第二報)	永田和弘	四六
56	解体新書以降の医歯学書に見られる歯科用語の変遷	嶋村昭辰・小林繁・上瀉口武	四八
57	桐村克己著「歯の養生法」の原資料の疑義についての研究	森山徳長	四〇
58	ボードインのもたらした新しい神経生理学	相川忠臣・ハルメン	四二
59	ケーニヒスベルグ大学と大阪大学(生化学で結ばれる橋)	柴田幸雄	四四
60	野口英世著「Serum Diagnosis of Syphilis」(一九一〇初版)の出版とその経緯について	会田恵	四六
61	石塚三郎旧蔵・新潟県歯科医師会日誌——草創期の歯科界を探る	佐藤泰彦	四八
62	初代厚生大臣木戸幸一自筆の血脇守之助への書簡(委員委嘱状)	山岸徳太郎・森山徳長・長谷川正康・石川達也	四六
63	日本大学歯学部創設者佐藤運雄先生の医術・歯科医術開業免状について	工藤逸郎・三宅正彦・見崎徹	四二
64	熊本県近代文化功労者として顕彰された一井正典について	松本晋一・渋谷敦	四四
65	岩ヶ崎接種結核事件に関するGHQ文書について	渡部幹夫	四六
66	戦後日本の外国人医師導入——導入プロセスと認識を中心に	今野卓美	四八
67	農村医学の発展——「農夫症」をめぐつて	杉山章子	四〇

68	戦後の視覚障害原因の推移と医療の対応	高林雅子
69	最後の高等学校(その二)	水川 秀海・嶋村 昭辰
70	陸軍で用いられた歯科囊と歯科機械	下 総 高 次
71	歯科医学と色彩学の関連性の考察	陶 粟 嬾・西 巻 明 彦
72	シーボルト記念館蔵の「阿蘭陀草花鏡図」とその背景について	ヴォルフガング・ミヒエル
73	華岡青洲が全身麻酔薬を使って行った乳癌手術を欧米に紹介したのは誰か?	高 橋 均
74	新たに確定した「乳巖姓名録」中の患者二三名の歿年月日について	松 木 明 知
75	彌性園蔵 幕末期の診療録	田 中 祐 尾
76	池田文書からみたお玉ヶ池種痘所開設の前夜	深 瀬 泰 旦

医史学文献目録 平成十二(二〇〇〇)年..... 順天堂大学医史学研究室編..... 四六

《本号の表紙絵》

エーテル・ドームの天上

1846年10月16日、歯科医師 W.T. G. Morton は、ボストンのマサチューセッツ総合病院の階段講堂において、吸入全身麻酔として硫黄エーテルを用いて、外科医 J.C. Warren の執刀により、顎下頸部の腫瘍を無痛で摘出した。

手術直後、静まりかえった満場に、Warren の声が響きわたった、「Gentlemen, this is no humbug! 諸君、これはペテンではない！」

この公開誌術の行われた講堂は、「Ether dome」と命名され、今に保存されている。

写真は、手術場所から、同講堂のドーム型の高い天井を見上げたアングル。開閉式の明かり窓は、同手術が陽光の下で行われたことを教えている。1986年、中原 泉撮影。

(中原 泉)